ラセル・エチ・コンエル博士著
高島素之譯

修養講話 青年實訓

「金剛石の土地」

国立国会
51.10.1
図書館

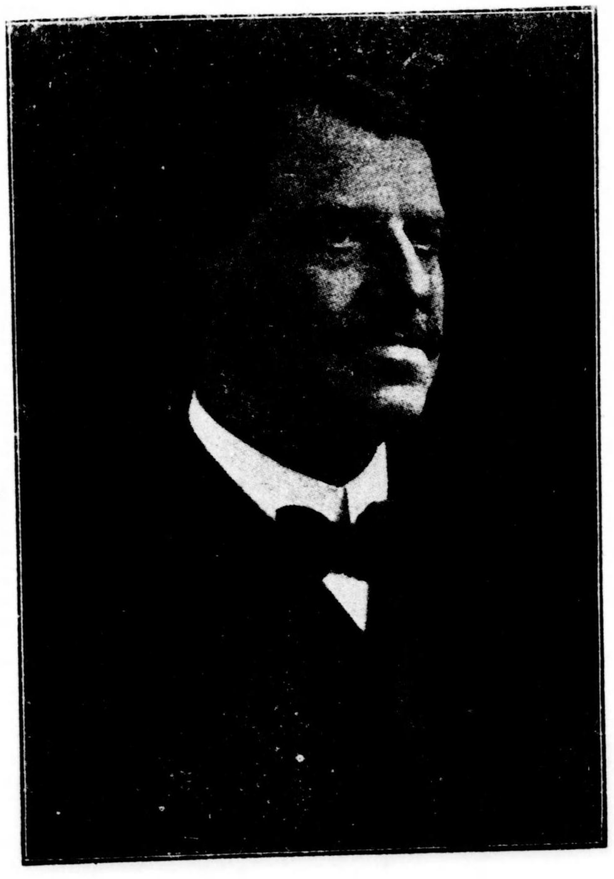
始

特 101
994

修養講話 青年實訓

『金剛石の土地』

ラセル・エチ・コンエル博士著
ジョン・ワナメーカア序 高畠素之譯



Russell H. Conwell

序

ラッセル・エイチ・コンエルのダイヤモンドの土地は之までも既に米國全土に廣く撒布されたものであるが、時と注意の力はそれを更らに高價のものたらしめた。そして、それは今や其發見者に依つて色々と新らたに組直された所があるので、是非とも之を社會公衆の手に附して、彼等の富力增進を助けなければならぬ。此寶石箱の中には、發見者自身の生涯の事業が極めて巧みに面白く書加へられてゐ

る。それは實に人間一個の力を以てして一日に何事を成し得るか、人間一個の生命が此世界に如何ほど貴重なものであるかを說明したもので、人間力の偉大壯麗が之によつて遺憾なく描出されてゐる。

私はコンエル君とはフイラデルフイヤに於いて三十年來の親友である。それで自然彼の人相風采も善く呑込んで居る。彼の男らしい伸々した風采は實にペンシルヴニヤ七百萬州民の第一模範として又其長者として全州に非常なる異彩を放つてゐる。

彼は既に其生涯の始めからして、公共事業の法廷に於いて『我まことに爾曹に告ん。もし芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れと命(いと)とも必らず移らん。又なんぢらに能はざること無るべし。』

てふ聖句の眞理に對する一個の信賴すべき證人であつた。

學生として、校長として、辯護士として、說敎師として、事業家として、著者、思想家として、講演者として、敎育家として、外交家として將又人の首領として、彼は實に其市都、其州、其生存の時代に對して永劫不磨の偉業を貽したものである。人は死せん。然しながら人の善業は決して永く亡びないのである。

彼の思想、彼の理想、彼の熱心は既に幾千の生靈を氣化激勵した。一個の熟練、技術家の力學說を滿載した書物は、正に總べての青年の注意に價する好著と云はねばならぬ。

畏友　ジョン・ワナメーカア識

目次

「金剛石の土地」譚……一—二一
演壇五十年……二二—三四
金剛石の土地……一—八九

「金剛石の土地」譚

ラセル・コンエル氏の一生中孰れの點より考ふるも其の最も顯著なるものは『金剛石の土地』と題せる演說に過ぐるもの無かるべし、演說自身は言ふまでも無く演說の度數と言ひ、萬衆に與へたる感化と言ひ、之に由りて氏が贏ち得たる金額と言ひ、特に氏が其の錢を處分する目的と言ひ、皆實に驚くべきなり、此の如き氏の大成功は氏の性格目的及び才幹を說明して餘りあるなり。

此講演を讀むに氏の勢力の横溢し希望に輝き熱誠に滿ち强烈の氣に富めるを見

る、所謂精神一到何事か成らざらんの慨あり、氏は此演說を爲す事五千回以上に達せりといふ、而も之が需用は毫も減少せず、其成功は毫も衰ふを見ざるなり、氏の幼年時代には思ふも痛ましき時ありき、一夕氏は予に語るに此事を以てす、談話中氏の聲は漸やく悲痛の氣を帶び其の益々過去に溯るや、其語調は愈々沈み勝となれり、其は氏が「エール」在學當時の事にして此時代は氏に取りて實に艱苦の日なりし、氏は在學の學費を有せず之に由りて多く働かんとして益々屈辱を感せり、其仕事の艱苦なりしが爲ならず、何となれば氏は如何なる艱苦をも耐え得るやう常に覺悟し居たりし、又た窮苦と困難ありしが爲ならず、何となれば氏は常

に困難を凌ぎ窮苦を忍ぶの用意ありしが故なり、唯だ個人的の屈辱は如何にしても氏の耐ふる能はざりし所にして五十年後に於ても之を追懷する毎に氏をして尙ほ痛苦禁ずる能はざらしめたり、然れども此等屈辱の中よりして遂に驚く可き偉大なる結果を生ぜしなり。

氏語つて曰く『是に於て予は固く決意して以爲らく他の靑年諸氏が大學に進むに當り之が爲に予の力の及ぶ限り一臂の力を貸さんと』、是に是て餘程以前よりの事なるが氏は『金剛石の土地』より生ぜる純益は擧げて此目的の爲に寄附せり、氏は豫め貸費生の名簿を作成して備へ付け居りしが、多忙なる氏の事故箇々に自分

にて調査する事は困難なりしも、各大學の總長はかゝる援助を要する諸生を知り居りて氏の許に申し込む事となり居たり。

予は此事を氏に質ねしに氏曰く『毎夜講演の濟み次第予は旅館の一室に在りて小切手の用紙を片手に孤座し、其旅館等一切の費用を當日受取りし總金額中より引き去り其殘額を小切手に記入し例の人名簿中の青年に送達する事となし居たり、而も其小切手と共に一通の手紙を認め種々勸告を與へ且つ此の補助に就ては唯だ上帝に對する外何人にも義務を負ふ所無かる可しと斯の如く予は固く青年諸氏にも申し聞かせ決して個人たる予に對しては何の義務觀念を抱く可からざるべきを諭し、但だ予の後に予の事業を繼承すべき有爲の青年を殘して予以上の事業を成さん事を期望するのみ云々』氏は更に微笑しながら語を續いで曰く『予は何も余計に勸告がましき事を述べたりとなす勿れ予は唯だ此等青年諸氏に對し一友人として之を補助するを努むることを知らしむるのみ。

氏の顏色はかく語る間にも晴やかに輝きて一段聲を揚げて曰く『此事は頗ぶる我ながら一種の興味を生じ勝負事にてもあるかの樣に覺え、手紙を送りたる後には直ちに人名簿中より其姓名に棒を引き直ぐまた其次の人に心懸くるなり』。

少し置いて再び語を續いで曰く『予は青年に學費の全部を十分に贈らんとする者

に非ず、但だあまり艱苦ならざるやう補助せんとするのみ、予は青年諸氏が予に膝を屈するを望まざるなり。

氏又た語りて曰く此事業に就きて何等報告樣のものを受くるを欲せず何となれば其報告書を檢閲し或は之に返書を與ふるが如きは非常の時間を要するを以てなり、而して特に青年諸氏が之に由りて屈辱の感を懷く事を恐るゝが故なり。

當時予は氏に其となく此事は徒らに麵包を水中に投棄するに等しからずや、之に由りて何等得る所なきに終らずやと諷せしに、氏は暫らく無言にてぢつと考へ居たりしがやがて『何事にまれ一事をなしたる時は其中には滿足の伴ふものなり結

果は畢竟其の自己の骨折りといふ感情にて十分に酬はる可し』と。

氏の書記の語る所に由れば近頃氏がミネソタ州を旅行せし際に『前に氏の金剛石の土地』に由りて補助せられし一青年と偶然途中に邂逅し、此青年は氏が實に恩人のコーンウェル博士たるを知るや早速其妻をも紹介し二人にて滿腔の感謝を氏に捧げ氏も大に感動せられたり、青年夫妻は感極りて泣かんとせしに氏自身も殆ど等しく感動のあまり涙を催さんばかりなりし。

氏自身の辭を借りて言へば『此演說は男女を問はず苟しくも有用にして且つ高尙の事業を成さんと志すものを扶助せんとするにあり』而して氏が一たび壇に立て

之を演ずるや其の聲其の風采其態度は直ちに人を魅せずんば止まず而も其說く所は極めて單簡の事實なり。

然れども其の中に天籟の啓示、諷諭、助力を十分に含み居れり、氏は地方の情況に由り到る所に多少其の講演を變化して悉く其場合に適切なるやう斟酌せり、然れども其の論旨は決して渝らず、已に幾度も之を聽聞せし人も毫も倦む所なく幾遍も之を聽かんとするなり、氏も此事を痛く興がりて其中には二十度まで聽講せし人々ありなど得意に語らるゝ事あり。

氏の演說は氏が嘗てアラビヤの一老人と共にニネヴェに旅行せられし時に其の老

人が氏に語りし譚にて始まる之を聽くものは何人もさながら其アラビヤ人人聲音、沙漠の沙及び椰樹の葉の風に動くのを目前に見聞するの思あり、氏の聲は至極無雜作にして流暢を極はめ何の苦もなくすら〳〵と口を衝きて出づるなり——然れども其の効果は非常にして其の景色はあり〳〵と生動活躍するなり、之に由りて直ちに聽衆を神秘力に由りて魅し去り、之をして熱心に傾聽せしめ之を笑はせるなり眞面目ならしむるなり自由にする力あり、要するに氏は殺活自由の力を有す、此力は氏をして演說者として成功せしむる根本的の資格なり。

前にも述べたる如く同一人が幾度となく繰り返へし〳〵出席する事は氏の大に本

懐とせられし所にて、近頃氏が自己の教會にて例の講話をせられしに、誰しも之れは例の古い譚なるが故にほんの少數の熱心家のみが出席するならんと豫想せられしに、當日になりて見れば全教會が悉く此の熱心家にて、其の廣大なる講堂も殆ど空席を剩さゞるまでに滿ち〳〵たり、更に驚くべきは元來當日の講演は氏の教會にて催されしも聽講無料に非ず、故に各人は一々其席料を拂はざる可かりしにも拘はらずかくまで多勢の聽者ありしなり、而して入場料を拂ひてまで入らんとするは如何に其の熱心なるを證して餘あるなり、かくして聽衆はなだれを打つて場内に流れ込みて講演者も講演もさも新奇なるかの如く待ち構へ居るなり、其講話其物は之を讀みしのみにても十分事足るべきも一旦氏自身の明晰輕快なる辯舌を以てすれば更に光彩陸離として今更ながら、氏の實際の演説が如何に力あるかを覺らしむるなり。

其晩は氏は殊更に幾年か以前になせし演説を悉皆其の通りになさんものと決心せり、時勢も地方も餘程變遷せしも其に頓着なく全く當時の通りにて試みしなり、談話漸やく酣なるに及び聽衆は例の如く湧き返へるが如く大笑に笑ひ崩れて氏自身も幾年か以前にせし演舌其儘のつもりにて毫も自分に疑ふ所無かりしなり、然れども氏は知らず〳〵何時となく其演説の中に近代的色彩を加味し居りて屢々

自働車などいふ最も新奇なるものを説明中に混じ居たるなり。

予が最後に氏の此講演を聽きしは實に五千百二十四回目なりし、五千百二十四回！何人も殆ど之を信ずる能はざるならん、流石に氏も今回こそはさまでの聽衆を得る能はざるを懸念して少し場末の場處にて開催せり、予はまた果して何程の聽衆が集りて何程の影響あるやを知らんとて予の居りし所より五哩許り隔りたる當日の會場にと出懸けたり、途中も甚だ暗く予も何となく當日は僅かばかりの聽衆が淋しげに集り居るものと豫想し居たり、然るに會場に到りしに會場といふは或る敎會の建物なりしが、席は八百三十人も收容し得べかりしに驚くべ

く其の八百三十箇の席は悉く塞り居りて一の空席なく、剩れる人々は皆其後に立ち居る盛況ならんとは、此の人々は多くは幾哩といふ遠方よりわざ〳〵來りしものにて、而も當日此講演のあるといふ事は殆ど廣告らしい廣告をなせしに非ずといふ、然れども人々互に『君も今晩コーンウエル博士の演說を聽きに行かるゝや』など其から其と傳りての結果なりといふ。

予は今尙ほ當日の模樣を記憶せるが思ひ出すのみにても恍惚として醉ふが如き心地せらる幾百の聽衆は講演の最後まで熱心に傾聽して時々心よりの喝采をなし餘程滿足せしと見え其都度首を傾け頭を動かし一人として賛嘆の色を示さゝる無

し、而も聽衆が唯だ是に由りて滿足し喜悅し興味を感ぜしといふのみに止まらず又た誰も一人として各々何か自己及び他人に對して有益なる事を爲さんとするやう刺激を與へられざるなかりし、而も予は其刺激が必ず誰かに由りて行爲の上に實現さるべきを看取せり、吳々もかゝる偉人の感化力の大なるを思はしむるなり。而も氏の公の爲めに私を忘るゝの崇高さよ、氏の如き老齡を以てして而も病苦ある身を以てして、決して其の講演を宜加減に切り上げざるなり、聽衆が感動し或は刺激せられたりと見るや病苦を忘れ時間を忘れ夜の已に更けたるを忘れ之より遠く家まで歸らざる可からざるを忘れ寬大にも二時間も引續き演說す、而も聽衆

は二時間が四時間となるも尙ほ之を希望して已まざるなり。

氏の演說は常に平易にして且つ同情に富み、快活にして落付あり、而も機警にして平易日常の滑稽を交ふ、而も聽者は氏が一言一句悉く非常に眞面目にして熱誠なるを忘れざるなり、聽衆は時に腹を抱へて笑ひ時には眞面目になりて沈默す、熱誠と警駭と悅樂と決心と其時に應じて其々感動するを見る、氏の話調の眞面目にして嚴厲なる時或は熱烈なる時は聽衆は氏を以て熱誠嚴格の人と爲す、而も氏が何か滑稽の事を話す時は氏自身も如何にも可笑しさに堪へざるが如く其笑を嚙み殺さんとす、但し此の笑は氏自身にて自分の滑稽を笑ふに非ずして、氏と

聽衆と渾然其の妙所に共鳴するの結果なり。

氏の此の唯一の講話に由りて無數の成功が收められたり、氏の講話に由りて感奮して成功せし人々は澤山聞く所なれども此他未だ聞えざるものも恐らく非常に多き事なる可し、近頃予が直接氏より聽きし一二を擧ぐれば其の一人は農家の少年にして遠路氏の演說を聽聞に出懸け歸途此の少年（今は已に立派の大人なるが）道々如何にせば自分を向上せしめ得るやを考へしに家に還りつく前に或る田舍の學校に敎員が一人入用なるを聞き込めり、此少年は固よりよく人を敎へる術を知る筈なきも、しかし稽古すれば出來ぬ筈なしと考へ、終に大膽にも採用して貰ひ

たしと申込めり、あまり熱心の色が見えし爲か兎にかく臨時の雇といふ事になり、彼は小躍りして喜び一生懸命に熱心に獻身的に骨を折りたり日毎の勉强の効顯はれて數ケ月の間に遂に本官に採用せらるゝに至れり、かく話し來りて氏は例の特徵の發端と結末との間の細々しき事實を省略して、唐實に「其少年は今はさる大學の總長となり居れり」。

ほんの近頃の事なるが一人の婦人が氏の所を訪ねたり此婦人は身分あるさる有名な高給を取り居る人の妻君なるが其良人といふ人は人の爲めに錢を費す事甚しく爲めに二人とも時々手許不如意に及ぶ事あり、然るに此頃に至り兩人さる田舍

に別莊用として少しばかりの土地を僅か數百弗にて買ひ求めたるが、此妻君氏の演說を聞きて笑ひながら獨語して『どうやら此の耕地は金剛石は出さうも無し』といひ居りしが話の模樣に由れば此の畑より非常に淸洌な水の噴出するを發見せり、尤も買入れたる當時は誰も此の泉ある事は氣付かざりしなり、此妻君丁度氏の演說を聞きたる當時なりしが故にふと思きつきて此水を分析せしに非常に純潔なる事を發見し、目下之を瓶詰とし特別淸潔の泉水と銘を打ちて賣り出し、現に之に由りて利を收め居り、又た別に冬時には此池の氷を切り出して商賣にし居れり是皆『金剛石の土地』の御蔭なりとて禮を述べたりといふ。氏は此の唯一の講演

に由りて前後總計數百萬弗の收入を得たり、斯る事實は實に驚駭すべきものなるが又た氏に由りて如何なる大善が世界に行はれたるやに思ひ到らば一層驚嘆すべきなり而も氏は之を私の爲めに贏るに非ずして他人の補助に供するなり。更に又た金錢以外に於て此講演に由りて何程人心を感奮興起せし事に思ひ至らば到底尋常筆舌の能く盡す所に非るべし。

氏の同情は常に疲倦困弊せる人々の上に在りて、常に自己改善の爲めに努力し居れるなり。昨一九一四年氏及其事業に對して空前の紀念式を擧行せられたり、是より先き氏の友人諸氏は氏の講演が五千回に達せんとするを知り此前古無比の講

演を紀念せんとて企劃する所ありたり、氏も當日フィラデルヒヤの音樂學校に於て例の如く講演すべき事を快諾し、當日は其建物は勿論其の屋外の道路までも群集を以て充塡されたり、此の第五千回講演會の總上り高は九千弗以上に達せりといふ。

氏が其出身地の愛慕と尊敬を得たる事は但だに當日幾千といふ人が爭ふて氏の講演を聞かんとせし一事を以て判ずべきのみならず、幾多著名の人物が此祝賀會開催の爲め地方委員として盡力せしにても知らるべし、單に地方的のみならず又た實に國家的にして廣く國民全體が氏を敬愛し國民全體が氏の已に完成して尙ほ現

に成しつゝある事業に對し如何に感謝の念を抱き居るやは此等著名の委員中に九ケ州の知事が加入し居るの一事を以て證す可し、卽ちペンシルヴァニヤ州の知事は當日親しく出席して氏に敬意を表し、氏に贈るに州の自由權を表象せる一箇の鍵子を以てせり。

『州の自由權』――然り氏は七十の高齡を以てして之を獲たり、州の自由權國家の自由權、此の俠士此の成功の福音の傳道者は個人の自由、改善、釋放、向上の爲めに驚嘆すべき事業を成し遂げたり。（素水譯）

ロバート・シャックルトン識

演壇五十年

自序傳！此の御請求には甚だ困却せり、予の公的生活といふも別に何等の奇も無く讀む人も平凡殆ど益する所無かるべし、予は予に關する自身の手控へ新聞の切り抜き等少しも保存する所無し。友人諸君が予の爲めに推擧せられし所は多くは過賞當らざるものゝみ、故に予は殆ど自傳を記すべき土臺なし、唯だ片々憶ひ起せし所を書き綴るに過ぎず。

予が不束なる五十年の演說が意外の好評を博せるは全く友人及公衆諸氏の御庇護

に由るものにして殆ど感謝の辭無し、之に由つて豫想外の成功を收むを得て我なから不思議に堪へぬ位なり、予の成功は全く予を援助せられし紳士淑女の賜にして予は予の目的に向つて躍進し聊か微力を致したるも此等紳士淑女諸君は大概故人となられ予のみ瓦全餘命を貪ることとなり時に悵然として獨り天を仰ぐ事なきに非ず。

靜に蔭の手を伸ぶるを待ちつゝ
今暫らくせば其は我をも捉ふるなり

噫五十年よ、予は當時演說も何も知らぬ一青年にして、南北戰爭の近く至らんと

する際には予はエール大學に在學中なりし、予は幼年よりして何となく宣教師を以て自己の使命なるが如く思惟し予が亡き父が毎夜泣きて神を祈るのとき何となく予を救世主に紹介せらるゝやう感じたり、然れども予の知きものには、何となく空恐しきやうに思はれ如何にしても之を逃れんと思ひ他の職業ならば何でも苦しからざるも之ばかりは平に御免なりと思へり。

其中戰爭となり、世間騷がしく公會に演舌に新兵の募集やら色々の事始まりしが故に予も出征軍の爲めに『歴史の教訓』と題し處女講話をなせり時は一八六二年にしてガフ氏の紹介なりし一個貧弱なる學生の調子外れの演説は如何にも滑稽なりし事ならん、然るに意外にも「バフ」氏の褒辭やら花輪やら喝采にて自惚にも是ならどうかかうか演壇に立ち得らるべしと考ふるに至れり。

其時より「ガフ」氏の勸告に由り『練習』と號して如何なる招待にも臆面なく手當り次第出任せ次第に推參する事となれり、隨分其中には情け無い程の失敗もありたるが之は予が宣教師にならざりし酬ひなるべしと自ら諦めたり、予は何處でも構はず演舌し游覽會、日曜學校、愛國會、葬式紀念會、始業式、討論會、家畜會等一視同仁何處にも無料にて出掛けたり、最初の五年間は經驗が報酬位のものなりし、其よりして特志の贈り物がぼつ〳〵來るやうになり、水兵用小刀、ハム、書

物等なりしが、最初に現金の報酬を受けしは農夫の會合に出席して『借馬』と題して一場の演舌をなし七十五錢貰へり、之に就いて一場の奇談あり、其當時の一農夫は其後ソールトレーク市に移住してモルモン禮拜堂の一委員となり居たりしが、偶然にも予を招聘して其處で『山上の人』と題する演舌を乞ひ五百弗を支拂ひたり。

予は最初かく練習を重ね居りし際にも或は軍人となり、通信員となり、辯護士となり記者となり說教者となり衣食を自辨する事を得たり、故に講演に由りて得たる收入は自己の私用に供せし事は五十年間殆ど稀なりし、最後の三十六年間は演

說の收入は悉く慈善事業に投ぜり、就中『金剛石の土地』は毎年平均二百回以上も講話し一回平均百五十弗の割にて講演料を受け取りたる勘定なり。

レッドバス氏が始めて講演局と名くる會を組織したる時予は其中の一講演者として招聘さるゝに至りしは實に予の得難き幸福なりし、レッドバス氏は有名なるジョンブラウン氏の傳記を著し、而して予が父はブラウン氏の古き友人なりしを以て予は其緣故に由り夏休み中に其傳記を賣らせて貰ひしが知己たるの始なりし、又テーラー將軍には一時其のボストンの『デーソートラウェラー』の報道員として採用せられたる事あり、此人は予を非常に親切に世話せられ今思ひ出しても其の

友誼に感佩し居るなり此人が予をレッドパス氏に紹介し呉れられたるなり、邊鄙な町にて缺員ある節は補缺として間に合ひ可申が、巨頭株は動もすればさる所にては中々得られ能はざるべき事も有之候とて

最初予がレッドパス氏の局に出勤せし時は孰れも當代の歴々のみの顔觸にて、予の名も其の名簿の後にあるを見て今思ふても冷汗を催すばかりなり、最初は此等の大家が予の演壇の後より笑ひながら聽き居られると思ひて何とも耻かくして堪へ得られざりし、然れども色々此等諸大家の奬勵を得て漸やく演壇の人となるを得たるなり。

演説は六ケしくいへば中々骨の折れて責任のあるものなり唯だ人を笑はせるのみにては何の益にもならず前にいへる如く予は何等かの使命を上帝より授かり居れるやに考へたるが故に演舌も何か公益になるやうにと常に心掛けたり一八七九年に愈々傳道師の仲間入りして以來一層此の考を深からしめたり。

誰も同様ならんが何事も中々常に坦道のみに非ず、演説中には或は惡路に出り或は宿屋の穢い事汽車の遲くなる事、接待委員のわる親切或は睡眠時間の不規則等は直ちに忘れ得べき瑣末の事なり、氣轉の利きたる宿屋の待遇慇懃なる謝辭、青年が之に由つて利益したる結果等はいつ考へて見ても愉快なる事柄に屬す、上帝

は長く此等の人々に祝福を垂れ賜はん事を祈るなり。

或人は予に向つて五十年間の旅行の中には時、危難に罹りたる事なきやと成程御尤の質問なるが實に不思議なるは一度も是といふ災難に遇ひたる事無き事なり、二十七年間は引續き三時間に二回づゝ演説したる割合なるが一度も違約したる事無し、無論其間には特に特別列車を仕立てたる事あるも時間も場所もキチンと間に合ひて後れても數分位の事なり、災難もありたれども如何なる運のよきにや常に予の前と後に起つて常に予は之にぶつからざりしなり、時には遠く目の前に起りし事あるも予には別條無かりし全く天祐といふ可しジョンストンの洪水地

方にては予の列車が通過するや否や橋梁は墮落せり、或時は大西洋にて淺瀬に乘り上げたる汽船中に二十六日間も取り殘されたる事あつても無事に生存せり、或る時は予の後に乘りたる男が直ぐ其寢臺車で怪俄死したる事あり、汽車の脱線したる事は再々あつても誰も死したるものなし、盗賊に脅かされたる事も屢ありたるも遂に別條無かりし、上帝も同胞も等しく予に慈悲なりしと思はる。

然れども此の講演なるものは僅かに予の事業の一面に過ぎず、フイラデルヒヤに於けるテンプル大學及び其教會は予の尤も力を用ゐしものにして三千人足らずの會員の力に由りて年々六千弗以上の費用を集め之に由て人道の爲めに貢獻しつゝ

あるは均しく世人の驚嘆する所なり、又たサマリタン病院の急速の進歩ガレスト
ン病院の施藥所も間斷なく貧者病者に益する所あり、毎年幾萬人づゝ來院して救
を求めつゝあるなり、予は地方に出てゝ演說しつゝある間も時々刻々此等の善を
なしつゝあるを知つて心竊かに欣喜の情に堪へざるなり、
テンプル大學は僅かに二十七年前の創立にかゝるも已に殆ど十萬人の青年男女
を社會に送り其々高位置と高給を取り居るなり、而も此等男女は恐らく他に在り
ては殆ど敎育を受くる能はざる人々なりしなり、忠實にして獻身的に努力し吳れ
らるゝ幹部の數は二百五十三人の敎授より成り實際の事業は此人々の盡力に由る

のみにて予は聊かも力を致す無し、予は茲に大學の事を述べるは予の功を誇らん
とするに非ず唯だ予の五十年の演壇生活が僅かに予の生活の一面なることを示さん
とするのみ。
諸君熟知の『金剛石の土地』はほんの偶然の講話にして最初は第四十六マサツチュ
ーセッ聯隊の戰友の再會の席に述べたるものにて予は南北戰爭當時此聯隊の隊長
たりしなり、予は其れ限りにて二度と此を演ぜんとは思ひ居らざりし、然るに二
度目に之を所望せらるゝに及びてもまさか今日まで生き延びて五千回も繰り返さ
うとは夢にも想像し居らざりしなり、然らばかく此演題がかくまで評判となりし

秘密は如何といふに自分にも他人にも説明する能はざるなり、予は唯だ演説毎に之は好機會なるが故に何か少しにても公益になるやうと自ら氣を勵まし、且つ地方の事情に一般的理論を應用せんと心懸しのみ。

噫予は老いたり、予が茲に筆を執り居る手は間も無く演壇の上にあつて身振りする事能はざるに至るべし、故に予は切に望む此書代て世に出て長く我が親愛なる兄弟姉妹諸君の爲めに聊か裨益するあらん事を。（素水譯）

一九一三年九月一日．

マサツチユーセッツ州南華盛頓にて

ラセルエチ、コンエル識

修養講話　青年實訓

金剛石の土地

高畠素之譯

△本書は最新式の講演であつて、たま〳〵著者コンエル博士の生れ故郷なる米國フイラデルフイヤで講述されたものである。著者が書中フイラデルフイヤなる言葉を用ゐる場合には、それは單に著者自身の生れ故郷を指すばかりでなく、又實に此書を讀む人々めい〳〵の生れ故郷だと思つて貰ひたい。

私は數年以前英國旅客の一隊と、チグリス、ユーフラテス兩河を降つたことがある。其時我々を案内したのは、一人のアラビヤ老人であつた。私は其後も屢々

此老人のことを思ひ出す。そして此老人の物の考へ方が、如何にも米國の床屋に似てゐたことを思ひ起す。彼は我々を案内して給料相當の仕事をすることばかりが自分の義務だとは思つてゐなかつた。彼は又いろ〳〵の面白い噺をして、我々を樂ませるのを自分の義務と心得てゐた。私は今では大抵その時聽いた噺を忘れてしまつたが、然し私の何うしても忘れることのできぬ噺が一つある。彼は私の駱駝の端綱を引いて河邊を案内した。其時彼は矢繼早にいろ〳〵の噺をして聽せた。で、私はしまひにはモウそれに聽きあぐんで、彼の言葉に耳を傾けなくなつた。それを見て彼はモウ堪え切れなくなり、自分の被つてゐたトルコ帽

を脱いでソレをグル〳〵振りまはして、私の注意を引かうと努めた。私はソレを努めて見ぬ振りしたが、それでも絶えず目の前にチラついて來る。然し何んなことがあつても、私は決して彼をマトモに見まいと決心した。又噺を持出されては閉口だと思つたからである。が、とう〳〵私は彼を見まいとして見てしまつた。それが最後、彼は又も別の噺をシヤベリだした。

彼は斯う云つた。『今度こそは、特別の友達以外には話すまいと思つて、私が今迄大事にしまつて置いたお噺をお聽かせしませう』。彼は此『特別の友達』と云ふ言葉に殊更ら力を罩めた。それで私はツイ傾聽してしまつた。私は其傾聽したこ

とをいつも嬉しく思つてゐる。それは私ばかりでない。此所に聽講せらるゝ千六百七十四人の青年諸君も亦同樣にそれを嬉しく思はれるに相違ない。

其噺は斯うであつた。昔インダス河から程遠からぬ所に、一人のペルシャ人でアリ・ハーフエドと云ふ男が住んでゐた。此男は大層大きな畑地の外に、果園や葡萄園や其他樣々の庭園を持つてゐた。其上彼は大金を人に貸して多大の利益を占めてゐた。彼は金持で又何一つ不足を感じなかつた。彼は金持なるが故に何一つ不足を感せず、又何一つ不足を感じないから金持であつた。

或日のこと、此金持の男の所に佛敎の坊さんが訪ねて來た。坊さんは爐邊に坐つて、頻りと此世の由來を說き聽せた。此坊さんの說明によると、此世は始め霧の塊りであつた。其霧の中へ神樣が指を差入れてぐる〳〵攪きまぜてゐる中に、とう〳〵それが火の玉に變はつた。此の火の玉は久しく大宇宙を馳せ廻つてゐたが、其中水に落ち込んで、其外側が段々冷てへ來た。と、又今後は內部の火が急に爆發して、山や谷や丘や野原や其他いろ〳〵のものを外に押出して、とう〳〵此樣な不可思議世界が出來上つたのである。そして此內部の鎔解物が外に吐出されてから、一番手早く冷却したものが花崗石となつた。其次に冷却したものが銅それから銀が出來、金が出來て、最後にダイヤモンドが出來た。

『金剛石は日光の塊りです』と坊さんは云つた。なるほど金剛石が太陽から落ちた炭素の凝結物だと云ふことは、今日の學問から云つても間違のない眞理である。又坊さんはコンナことを話した。若しハーフエドが拇ほどのダイヤモンドを一つ持つて居れば、それで彼の州殘らずを買ふことが出來る。又若し彼がダイヤモンド鑛山を一つ持つて居れば、それで自分の子供を悉く王位に上せることが出來る。

とにかく斯うしてハーフエドは、いろ〳〵とダイヤモンドの貴い噺を聽いて、其晩はツク〳〵自分の貧乏を託ちながら寢に就いた。彼は何事にも無駄を謹んで

貯蓄に精だした。けれとも彼は矢張り貧乏であつた。それは物事に滿足することが出來なかつたからである。滿足の出來ないのは、自分が貧乏なことを怖れたからである。彼は『ダイヤモンド鑛山が欲しい』と云ひつゞけながら其夜はマンジリともしなかつた。

彼は翌朝未明に坊さんの室へやつて來て、坊さんを其夢中の眠りから搖り起した。そして『何處へ行たらダイヤモンドが見付かりませうか』と尋ねた。『エヽダイヤモンド？あなたはダイヤモンドを何うしやうッてのです』。『何うしやうッて、私は大金持になりたいのです』。『それぢや見付けに行らつたらいゝでせう。行つて

見つけるより外はないのです』。『でも何處にあるのでせう』。『眞白な砂漠の高い山合に河が流れてゐます。そこの砂の中に屹度ダイヤモンドが混つて居ります』。『そんな河が本當にありませうか』。『勿論いくつもあります』。兎にかく行つてごらんなさい。屹度見つかりますよ』。そこでハーフエドは『ぢや行つて見ませう』と云つた。

で、彼は自分の田畑を賣り拂ひ、貸した金を取戻して、一家を隣人に托して愈〳〵ダイヤモンド捜しに出かけた。彼は先づアラビヤの『月山』から其捜索を始め、そこを一廻りしてパレステナに入り、それから更らに歐羅巴へ辿つて行つた。其

中に路用は總べて使ひ果す、衣類や其他所持の品も悉く賣り拂つてしまつた。そして遂には見るも痛ましい乞食のなりをして、彼は西班牙バルセロナの海邊に立ち留まつた。折りしも高汐はヘルキユーレス柱の門を押寄せて來る。彼は何うしても此高汐の眞中に躍り込まうと云ふ誘惑を退けることが出來なかつた。そして哀れむべし、彼は遂に此恐ろしい大浪の底に沈み去つた。それきり彼はモウ此世の人でなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

案内の老人が儼めしい態度で此噺を云ひ了つた時、彼は私の乘つてゐる駱駝を

止めて、今一つの荷を負はせてある駱駝の荷の弛みを〆に行つた。其間私はいろ〳〵と今聽いた噺を心に思巡らした。『彼は何ぜ此噺を「特別の友達」でなければ話さないのだらう』。此噺には始めもなければ中途もなく、又終りもない。主人公は出たかと思へばモウ死んでゐる。私は當時未だ曾てこんな噺を聽いたことがなかつた。將來も恐らく聽くことはあるまい。

聽て彼は又私の側へやつて來て駱駝の端綱を取つた。そして更らに此噺の後を後げた。ハーフエドの畑地の買主が、或時其駱駝を連れて庭の小河に水をやりに行つた。そして駱駝が小河の淺瀬に鼻を挿入れた時、彼はフト其白砂の中に、何か妙に光るものを見出した。彼は其處から小さな黑石を取上げた。それには七色に美しく光る目がついてゐる。彼はそれを部屋に持ち歸つて爐邊の柵に載せた。それきり其石のことを忘れてゐた。

それから二三日過ぎて、前の同じ坊さんが此人の宅を訪れた。坊さんが應接間のドアを開けた刹那。彼はフト柵の上の光りに目を留めた。彼は慌てゝ其處へ飛んで行つた、そして大聲を張り上げて『オヤ茲にダイヤモンドがある。ハーフエドさんがお歸りになつたのですか』。

『イーエ何に、ハーフエドは歸りやしません。これはダイヤモンドぢやありませ

ん。只の石ですよ。家の庭にあつた石ですよ。』『イヤ俺には一目見れば、ダイヤモンドか何うか分ります。あれは確かにダイヤモンドですよ。』

そこで彼等は一緒に、先の古庭へ飛んで行つた。彼等は夢中で砂をホヂくつた。スルト不思議や、先のよりもモツト美しいダイヤモンドが、いくつも〳〵出て來た。

老人は斯う云つて、更ら一きわ力を罩めた。『あのキムバーレイ鑛山よりもモツト大きな、世界の歴史に類のない、あのゴルコンダのダイヤモンド坑は實に斯うして發見されたのです。』

斯う言ひ終つた時に、彼は再び其帽を振つて、一途に私の注意を引かうと努めた。彼はさうしながら尙云ひ添へた。『アリ・ハーフエドが若し茲にゐて、家や畑をよく捜したなら、彼はあのやうな見ぢめな最後を遂げずに、立派な「ダイヤモンドの土地」を見つけたであらうにホントにあの古庭の何處を掘つても立派なダイヤモンドの取れることが後から分つたのです。』

なるほど此噺の教訓を味つて見れば、老人が之を『特別の友達』以外には話さぬと云つた譯が分る。つまり老人は此噺で『お前さんは遙々こんな所に來るよりも、米國の生れ故郷にゐた方が餘ッ程マシだ』と云ふことを諷したものに違ひな

い。私には其譯がハツキリ飲み込めた。然し私は其飲み込めたことを内所にして置いて、今のダイヤモンドの噺からフト思ひついた小話を手早く彼に話して聽せた。それを又、私はこゝで諸君にお聽せ申さう。

一八四七年の頃、米國カリフオルニヤ州に一農場の持主がゐた。彼は或時南部カリフオルニヤで金が見付つたと云ふ噂を聽いた。そこでモウ居ても立ても居られず、ソコ〳〵自分の農場をサツター大佐に賣却して同地へ旅立つた――が、それきりモウ歸つて來なかつた。サツター大佐は其後件の農場内を流れてゐる小河に水車を架した。或日のこと、大佐のお嬢さんが水車の溝渠から一掴みの砂を

持歸つて、爐邊でセツセとそれを指で掬つてゐた。其時丁度そこに居合せた客人が其砂の中に美しい金の鱗を發見した。其後件の農場の僅々二三エーカア地から、驚くべし三千八百萬弗と云ふ多額の金が發見された。金欲しさに行衛不明になつた。先きの持主こそ善い面の皮である。

私は今から八年前、丁度其農場のある町でこの噺を講述した。其時同地の人の噂を聞くと、或地主の如き何年かの間、十五分毎に百二十弗の割合で高價の砂金を(但し無税)獲得したと云ふことである。今では税金が高いからそれ程でもないが、それさへなければ我々でも矢張り其位の收入は得られるとは、其時私が彼等

の口から聽かされた言葉であつた。

然し之よりも尙適當な例が、現に我々のペンシルヴニヤ州に起つた。曾てペンシルヴニヤ州に矢張り之も農場の持主が住んでゐた。彼は其農場を人手に渡さうと思つたが、其前に彼は當時カナダで石油採取業を營んでゐた從弟の所へ手紙を出して、自分を其雇人にして呉れよと申遣つた。此男は決して馬鹿ではなかつた。彼は他に代りの仕事が見付かるまでは、自分の農場を手放さうとしなかつた。凡そ誰が阿呆だからと云つて、他に代りの仕事が見付からぬ中に今迄の仕事を放擲する人間ほど阿呆なものはない。之は私の職業にも其儘適用される。只これから離縁しやうとしてゐる人間に適用できぬだけである。

彼がさう自分の從弟に申遣つた時に、從弟は斯う返事して來た。『石油事業に素養のないあなたを御雇ひ申すことは出來ません。』

そこで此男は早速『それぢや素養をつけて見せる』と云つて、それから彼は一生懸命に石油事業の研究をやりだした。彼は先づ世界創造の二日目の時代から研究を始めた。石炭は元來、創造の二日目當時地球を蔽ふてゐた植物の化したものである。彼は其所から先づ研究を始めた。彼は斯うして研究を續けてゐる中に、件の炭層から湧出した水が、卽ち石油であることを知つた。彼はそれから此水が

何うして泉となつて噴出するかを發見した。彼は更らに石油の色澤、其味、其臭、其精製法をも委しく究めた後、又例の從弟の所へ書面を出して『私はモウ石油事業を充分に了解した』と言遣つた。スルト從弟の方から『それぢや來たまへ』と云ふ返事が來た。

そこで彼は農場を八百三十三弗で人に賣却した。所が彼が出發してから間もなく、其農場の買主は家畜の水飲場の始末に着手した。彼は以前の持主がズット前に小河の片岸から斜に一本の厚板を二寸ほど水面に浸して向岸に渡し、水面に浮んでゐる毒々しい泡を皆んな其處に追上げる工夫をしてゐたことを發見した。か

やうにして家畜は泡の掬取られた美しい水を河下で飲むことが出來る。

所が豈計らんや、此泡こそ石油の浮滓で彼は斯うして二十年間も貴重な石油を堰止めてゐたのだ。それから十年して後、政府の調査した所によると、國家が此河から得た石油の利得は實に一億弗に上ると云ふ。又今から四年前の調査によれば、此河の價打は實に百億弗を下らないとの事である。かやうにして此土地の先の持主は、自ら石油の事をいろ〳〵と詳しく研究した揚句の果、斯くも貴重な土地を僅々八百三十三弗のはした金で人手に渡してしまつたのである。私は尙、モ一つの例を擧げたい。米國マサチユセツ州に一人の青年がゐた。彼はエール大學

に入つて鑛山學を學んだ。彼はそこに在學中既に立派な鑛山技師たる實力を養つたので、學校から後進者教授の任を托された。彼は當時既に一週十五弗の俸給を得てゐた。卒業後彼の俸給は更らに四十五弗に上り、正教授に任ぜられた。が、彼はそれを斷然拒辭して鄕里に歸つた。若し彼の昇給が四十五弗でなくて、十五弗半に過ぎなかつたならば、彼は寧ろ大なる誇を以て其職を守つたかも知れぬ。それが突然四十五弗に一躍したので、彼は今更らの如く自分のエラさを自覺した。そして彼は家に歸るや其母親に向つて斯う云つた。『お母さん、僕は實際四十五弗位の給料で働きたくないのです。私ほどの善い頭で、四十五弗とは驚くではありませんか。これからカリフオルニヤに出かけて行つて金坑を搜しませう。そして大金持になりませう。』

母親は之に答へて『金にならなくとも、幸福に暮らせれば、ソレでいゝぢやないか』云つた。『でも幸福の上に金持なら尙更らいゝでせう』。こんな問答の末、彼等は其持物を賣つて、カリフオルニヤでなくウイスコシンへ行つた。其處で彼は一週十五弗の俸給で、或鑛山會社に雇はれた。但し將來彼の力で新鑛山の發見された曉は、彼も亦其利益の分配に預ると云ふ但書を契約書に加へた。が、其鑛山も見付からなかつたと見えて、今後會社を退いて何處ともなく消失せてしま

つた。私は勿論彼が今何處で何をして居るか知らない。然し恐らく鑛山を發見しなかつたことだけは確かである。

所が或日のこと、彼の屋敷の買主が其畑から馬鈴薯を掘つて、それを籃に詰め肩に引ッ掛けて來た時、相憎ソレが石垣の先きにからまつて離れない。そこで彼は籃を下に置いて、其具合を直してゐる時、フト上を見ると、丁度門の隣の石垣の上隅に何か金屬の塊り見たいなものがクッ付いてゐる。後にそれが八吋四方もある銀の粗金だと云ふことが分つて、彼は圖らずも大儲をした。

先きの青年は鑛山學、鑛物學の教授として得べき一週四十五弗の俸給をも尙足

らずとして、自ら住み慣れた家屋敷を人手に渡して、鑛山捜しに出かけた。そして其運命の窮まる所は實に斯くの如し。彼は其屋敷に生れ、其屋敷で成長した。彼は何十年の間朝に夕に其屋敷の石垣に袂を觸れた。彼は其上立派な鑛山學者であつたのだ。

彼は今、何處で何うしてゐるか。それは固より知る由もない。然し私は多分彼が今宵、爐邊に其友を集めて、こんな問答を取換はして居るのではないかとも思ふ。『諸君は例のフィラデルフィヤのコンエルと云ふ男を御存じですか』『勿論噂に聽いて居ります』『ソレぢや之もフィラデルフィヤのジョネスと云ふ男は？』『矢發

り噂に聽いてゐます。」

そこで彼は笑ひ始める。そして周圍の友達に向つて『實は此う云ふ連中も皆んな僕と同じことをやつて居るのです』と云ふ。成る程さう云はれて見れば、諸君も私も皆な彼と同じ事をやつて來た。我々が此所で彼を笑ふと同じやうに、彼も亦彼所で我々を笑ふ權利を持つてゐる。が、然しそれだから我々は此所で彼のことを語つてならぬと云ふ道理はない。我々は實行者自らに說敎を期待することが出來ぬからである。

私は今宵此講堂に入つて諸君を眺めた時に、私が自分の五十年の生涯に於いて

絕え間なく目擊し來つたことを此所でも再び目擊した。それは外でもない、前に述べたやうな失策を其儘繰返して居る人々を諸君の中に見たことである。諸君は今現に諸君の住んで居られる此フィラデルフィヤに『ダイヤモンドの土地』を持つて居る。然し諸君は屹度答へて云ふであらう。『此所に「ダイヤモンドの土地」があるなどゝ考へて居るなら、君にはマダ此土地の事が善く分らぬのだ』と。

かるが故に、私は彼の北部カロリナでダイヤモンドを發見したと云ふ青年の記事を新聞で讀んだ時に大變面白く感じたのである。それは從來發見せられたるダイヤモンド中最も純粹なるものゝ一であつて、其附近からは以前にも幾個かさう

云ふダイヤモンドが發見されたことである。私は或る著名なる鑛物學者を訪れて其ダイヤモンドの由來に就いて意見を求めた。スルト彼は豫て用意せる米國地質圖を披いて、それが下方の石炭紀層を經て、オハイヨウ州及びミスシピイ河より西方に出でたるものか、或はそれよりも尙眞實に近いと思はれることは、ヴアージニヤ州を經由し、大西洋岸に沿ふて東方に出でたものに相違ないと云つた。兎にかく、ダイヤモンドが其處にあつた事は疑ひを容れない。あつたからこそソレが發見されたのである。そして又、其ダイヤモンドが漂流時代に何處か北方から流れ來つたことも事實である。して見れば此フイラデルフイヤに於いても、同樣

に貴重のダイヤモンド坑が發見されないとも限らぬではないか。諸君は何うしても、諸君の脚下に世界最大のダイヤモンド鑛山がないと斷言することは出來ぬのである。

が、之はホンの比喩に過ぎぬ。ダイヤモンドの有る無しは、實は何うでもいゝのである。私が此比喩を借りて言はんとすることは金儲の機會は決して遠きにあらず。今諸君の居る此フイラデルフイヤの內にあるのだ。そして其機會は、此所に私の講演を聽いて居られる殆ど總べての男女諸君に掴めるのである。私が今晩此壇上に立つたのは、決して六かしい理窟を講述しやうと云ふ考からではな

い。私は只眞理と信ずる事を分り易く諸君にお話したいのである。私が多年の經驗から收得した常識の敎ふる所に依れば、諸君は確かに諸君の手の屆く所に『ダイヤモンドの土地』を持つて居る。非常な金持になる機會を持つてゐる。世界史上未だ曾て此フィラデルフィヤほど金儲の場所に適當した所はなかつたのである。今日でも矢張り其通りである。

そこで私は敢て言ふ。諸君は何うしても金持にならねばならぬ。金持たることは實に諸君の義務である。かう云ふと或人は喙を容れるかも知れぬ。『君はさうして金儲の說法をして歩るくのか』と。曰く、勿論それに違ひない。スルト彼等

は又言ふ。『マア何と云ふことだらう。あなたは何故福音を宣傳しないのですか。何故金儲などを宣傳しなさるのですか。』『何故つて正直に金を儲けることは、之れ取りも直さず福音の宣傳ではないか。』私が世人に金儲を勸める理由は要するに之である。金を儲ける人は、世の最も正直の人たり得るのである。

所が又諸君の中には、斯う主張する人があるかも知れない。『私が今迄常に人から聽いた所に依れば、人が金儲をするとモウ非常に不正直になり、破廉恥になり、野卑になり、下等になる』と。そんな事を考へてゐるから、諸君は金持になれないのだ。諸君の信仰の根本は總べて虛僞である。私をして極めて簡明卒直に言は

しめよ、米國に於ける百人の富豪中確かに九十八人までは正直の人である。正直なるが故に、彼等は金持たることが出來たのである。又正直なるが故に、彼等は大事業を起し、自分と協力すべき多くの人々を發見することが出來たのである。

所が又或青年は云ふであらう。『然し不正手段で數百萬弗を贏得した人の噂も聞いて居ります』と。勿論聞いて居られるに違ひない。私も聞いて居る。然しそれは極めて稀有の出來事である。稀有ならばこそ新聞紙はサモ大げさにそれを書き立てるのだ。その結果諸君は、何の金持も皆不正の者と思ひ込んでしまふのだ。

此町の郊外には、美しい庭や草花に飾られた眞に和氣靄々たる家庭の持主が澤

山住んでゐる。諸君はそれ等の人々に私を紹介しなさい。私も亦諸君を。此市内に居る立派な人々に紹介しやう。人は家庭を持つまでは、眞の人とは云へない。自ら家庭を持つた人は、益々正直になり、益々純潔になり、益々廉恥を重んずるやうになる。そして又此家庭を持つと云ふことに依つて、眞面目に注意深く萬事に經濟的になつて來る。

人が金錢を持つことは毫も矛盾でない。宗教家などには、兎かく貪慾を攻擊する餘り、金錢その者を惡魔視して、金錢を『汚れ物』などゝ云ふ。そして結局は集金笊などを持廻つて、人がソレにお賽錢を投入れないと殆ど咀はんばかりに之

を惡口する。これこそ本當に矛盾ではないか。

金は力である。諸君は大なる合理の野心を以てそれを得るに努めなければならぬ。金のないより金のある方が、ヨリ多く善事を爲し得るからである。金あればこそ聖典の印刷も出來、禮拜の宮も造れるのだ。宣教師を送るも金、牧師を養ふも金、金を貰はないで、誰れが說教などするものか。我々は教會が給料を上げて呉れることを常に望んでゐる。最高の給料を拂ふ教會は、最も容易に其位置を高めることが出來るからだ。これは人生の何づれの方面に於いても同じである。最大の給料を得る人は、其給料が與ふる力を以て最大の善事を爲す事が出來るのだ。

だから諸君は金を儲けなければならぬと云ふのだ。諸君が此フイラデルフイヤで正直に富を得ることが出來るなら、進んでソレを得ることが諸君の最高の義務である。基督教的義務である。敬虔たるべく貧乏なれと說くは、驚くべき見當違ひである。

或人は又云ふ。『君は貧者に同情しないのか』と。勿論同情する。同情すればこそ、私は斯うして講演して居るのだ。然し私は貧乏人に同情するが、私から同情される貧乏人は至つて少數である。神の懲罰を受けた人に同情する譯はない。我

〳〵は生れながらの貧者には同情しなければならぬ。が、自らの罪により、或は又人の罪によつて貧困に陥つたのでない貧者は、此米國に一人もないのだ。兎にかく貧者たることは、總べて曲事である。

スルト又或人は立つて云はれるかも知れない。『君は世の中に金に勝る物ありと思はないのか』と。勿論。私は金より貴い物がありと思ふ。例へば戀は金よりも確かに立派である。人間世界に於いて戀に優る立派な物はない。が、金を持つ戀人は如何に幸福であらうぞ。金は力である。勢力である。金は惡事もなせば又善事をもなす。ソレを持つ人さへ當を得て居れば、必らず大なる善事を成し遂げる

のだ。我々は確かに貧者に同情する。然しながら、ソレは決して貧者でなければ、神に敬虔なる能はずと云ふことではない。我々は斷じてソンな馬鹿げた教を說くものではない。

今から數年前私の大學に、自分こそ全校唯一の信神家だと思つてゐる一人の青年があつた。彼は或夕刻私の部屋を訪れて斯う云つた。『先生、あなたは至る所で、青年に金儲を勸誘してゐなさるさうです。あなたは人の金儲心を煽動して、人を善人たらしめやうと努めておゐでなさるけれども、先生、聖書には「金は總べての惡の根なり」と書いてあります。私はソレを先生にお話しに參つたのです。』

私は聖書に決してソンナことは書いてないと主張した。そこで早速聖書を持つて來たまへと彼に命じた。彼は軈て聖書を携へて來た。そこで私は、彼に其句を捜して讀んでごらんなさいと命じた。彼は得意げに聖書を開いて斯う讀み上げた。『金の愛は總べての惡の根なり。』

成る程。聖書には確かにさう書いてある。そしてソレは全く眞理である。元來金の愛と金とは全く別である。金の愛が總べての惡の根だと云ふことは、決して金其者が總べての惡の根だと云ふことを意味しない。蓋し金の愛とは金を偶像視することである。金を崇拜することである。金に限らず、物を偶像視することは

總べて惡事である。これは聖書の命令である。又我々の常識もさう命じてゐる。金の用途を考へないで徒らに金其者を崇拜する人、金を單に金として偶像視する人、金を貯へることに熱中してソレを有利に使用する事を知らぬ人、此う云ふ人は卽ち守錢奴であつて、之こそ萬惡の根である。私は彼に斯う說いて聽せた。

が、斯う云ふ問題は之でモウ切上げやう。そして『然らば此フイラデルフイヤに金儲の機會ありや』と云ふ、恐らく滿堂の諸君に共通のお尋ねにお答へしやう。金儲の機會は何處にあるか。ソレを知る事は甚だ容易である。そしてソレを知ると同時に、ソレはモウ諸君のものである。斯う云ふと、諸君の中には或は

コンエルさん、あなたは三十一年も此土地に住んで居りながら、此土地で事を爲すべき時代の既に遠き昔に屬してゐることを知らぬのですか』と反問せらるる方があるかも知れぬ。『否、決して知らぬ事はない。』『さうでせう、私も自分の經驗でそを知りました』。『あなたは何んな仕事をなさつたのですか。』『私は此地で二十年も商ひをしてゐましたが、其二十年間に一千弗以上は迚ても儲けられませんでした。』

『二十年間に一千弗？　そんなことなら、あなたは寧ろ十九年九ケ月以前に此町から逐はれてゐた方が增しだつたのです。苟くもフイラデルフイヤに店を張つ

て、それで二十年に一千弗とは何事ですか。そんな人は此町で商ひする資格はないのです。』『でもあなたにだつて、今日此土地で五千弗儲けることは出來ないでせう』。そんなことを云ふから困る。試みに諸君の四圍を見廻はして、人々の需要して居る物をよく調べ、そして其需要に對して諸君が充分の供給をなし得たなら諸君がそれに依つて居る利益幾許なるやを計算して御覽なさい。さうすれば、諸君の儲口は難なく分るのだ。

『あなたは實際、商賣上のことは何も知らないのです。說敎師に商賣は分らぬものだ』と、諸君の誰れかは云はれるかも知れぬ。ヨシそれなら、私が決して此

道に素人でなく、立派な専門家であることを諸君に證明して見やう。

私の父は田舍に店を張つてゐた。元來田舍で商賣をすることは、商業上の經驗を得るには最も適當な仕事である。私は敢て自分の經驗を誇る譯ではないが、私の父が他所に出かけて不在の時は、何時も私が其店の責任を托された。さう云ふ事は餘り度々でもなかつたが、然し善くある事だつた。スルト一人のお客樣がやつて來て『大型ナイフは無いか』と云ふ。私は『ヘイ御座いません』と答へて濟ましてゐる。其次に見えたお客に對しても、又同樣な態度である。スルと又一人のお客が見えて、同じやうに『大型ナイフはないか』と云ふ。『ハイ御座いませ

ん』と答へたが、さて『何うして斯うも大型ナイフの需要が多いのでせう』と考へた。が、當時マダ私は、神の事業の土臺と商賣の原理とが全く同一であることに氣付かなかつた。宗教を商賣に應用することは出來ぬ』と吹聽する人は、思へば商賣上の白痴である。然らずんば破產者か泥棒である」彼は必らず數年を出でずして商賣に失敗する。それは宗教を商賣に應用しないからである。私が當時父の店を、キリスト教原理に從ひ神の法則に從つて營んだなら、私は必らず此三番目のお客に對して大型ナイフを備へて置いたに違ひないのである。さうすれば彼に便宜を與へることも出來、私自身も亦ソレによつて利益を得る事が出來た

のである。

無暗に信仰深い人々の中には、物を賣つて利を占めるのは罪惡だなんて考へてゐる者がある。飛んでもない事である。實費以下に物を賣る人こそ、實に罪人と云はねばならぬ。我々は、自分で自分の始末のできぬやうな人に、金を托することは出來ぬ。一家に於いて自分の妻に忠實でないやうな人間を信用することは出來ぬ。此人生に於いて、自分の精神、自分の品格、自分の生命を以て事業を始め得られぬやうな人間を信ずることは出來ぬ。

自らも生活し、人にも生活させる事、之は實に福音の基本であり、常識の原理

である。人の正當な報酬を奪ひ、人に拂ふべき利益を奪つたと云ふ自覺を以て、寢に就く人は決して愉よき眠を樂しむ事は出來ぬ。彼は翌朝も非常に疲れたる身體を以て床を離れ、見苦しく汚れた良心を以て仕事に取り掛らねばならぬ。けれども自分の生涯を通じて絶えず人に利益を分ちつゝ、自分の權利を主張し、利益を要求する人々は、必らず自らも生きる。加之これは實に巨萬の富への大道である。多くの百萬長者の傳記を讀んで見れば、私の此言の必らず眞理たる所以が分るであらう。

そこで若し此席に、フイラデルフイヤで店を開いて見たが、何うもうまく行か

なかつたとコボス人があれば、ソレは確かに正當な方法で商賣を營まなかつた報いである。假りに私が明日其人の店に行つて、『あなたは千二百四十番地のAさんのお宅を御存じですか』と尋ねたとする。スルト其人は『エー存じて居りますとも、Aさんなら向ふ角の店がそれです』と答へる。『彼の人は何處から來たのでせう。』『存じませんネ。』『家族は幾人でせう。』『存じませんネ』。『何處の會堂へ出るのでせう。』『存じません。そんな事は存じやうともして居りません全體あなたは何用あつて、そんな事をお聽きなさるのですか。』

諸君が若し此地に店を張つてゐて、私が諸君に右の如く尋ねた場合、諸君もや

はり此樣に答へますか。若しさうだとすれば、諸君も矢張り私が曾て父の店を受持つ時と同じ主義で商賣してゐるのです。諸君は諸君の隣家が何處から來て、何う暮らして居るかを知らない。又知らうともしない。若し諸君が努めてソレを知らうとしたならば、諸君は必らず金持になつたに違ひないのである。然るに諸君はソンナ事に一向頓着なく、徒らに『金儲の機會なき』事を觸れ廻はる。諸君の失敗の原因は、諸君のスグ足下に横はつてゐる。事を氣付かずに居るのだ。

所が又諸君の中には『私には商賣は出來ぬ』と云はれる方が居るも知れぬ。なぜ出來ぬかと問へば、『資金がないから』と云ふ。イクジなしの氣取屋よ。彼等は

口癖のやうに『資金さへあれば、金持になれるのだが』と云ふ。『君は資金で金持にならうと思つてゐるのか』と問へば『勿論』と答へる。私は敢て云ふ。『勿論、資金では儲からぬ』。

全體、若い男女が自分の實際の經驗に依つて得た金よりも多くを持つと云ふことは。實に笑ふべき事である。親から財産を譲り受けることは、青年男女に何の手助けにもならぬ。又諸君が子供の親として彼等に財産を殘すことは、毫も彼等の爲にならぬ。財産よりは寧ろ教育を殘さなければならぬ。名譽を殘さなければならぬ。善き友を殘さなければならぬ。兎にかく彼等が金を譲り受けることは、

彼等自身に取つても、又國民全體に取つても、決して爲になることでない。何等の經驗を持たぬ金持の息子ほど哀れむべき者はない。

人生に於ける最善事の一は。青年が自ら其生活費を儲けやうと決心した時である。彼等が若い婦人と婚約して、之より自ら獨立して家庭を設けやうと決心した時である。彼等は以後其婦人に對すると同じ熱心、同じ愛情を以て、他の善事を憧憬するやうになる。彼等は斯樣にして又金を貯め始める。彼等は今迄の惡い習慣を放棄して節約した金を銀行に預ける。かくて彼等が愈々新妻を其家に迎へる瞬間。彼等は必らず何人も模倣し能はざる雄辯を以て斯う叫ぶであらう。『私は自

分で此家庭を築いたのだ。之は總べて私のものだ。私は之をお前に分けてやるのだ』と。此時や實に、人生最大の幸福と云はねばならぬ。

此幸福は金持の息子には味はれない。彼等はモット遙かに宏壯な邸宅に、其嫁さんを迎へるかも知れぬ。然し彼等は初中斯う云ひ通さねばならぬ。『之はお母さんから戴いたのだ。私は之をお母から讓られたのだ』と。ソレで嫁さんも遂には、それなら私お母さんと結婚すれば善かつたと云ふやうになる。私は金持の息子を憐まずには居られない。

マサチユセツ州廳統計によれば、金持の息子十七人の中一人までも、金持として生涯を終つたものはないとの事だ。尤も中には老ヴンダアビルトの樣な人もある。彼はお父さんの所へ行つて斯う尋ねた。『あなたのお金は總べて、あなたの力で儲けなさつたのですか』。スルト父は答へて曰く『勿論さうだ。俺は始め二十五仙の日當で渡船場の船頭になつた。私は其處から出發して、徐々に自分の力で此財産を造り上げたのだ。』

『本當にさうですか。それぢや私はあなたの財産を一文も戴きますまい』。かう云つて彼は其日の夕刻自ら渡船場に行つて、自分を其處の船頭に雇つて呉れと申込んだ。が、相憎そこで仕事を得られなかつたので、彼は他に行つて一週三弗の口

を見付けた。

勿論、金持の息子が斯う云ふ事を爲樣と思へば、彼等は正に貧者の受くる試練艱難を受けるであらう。此試練は大學敎育よりも遙かに貴重のものである。彼等は斯樣にして其父の財産を監督することが出來るのだ。所が金持はなか〳〵我子に斯くの如き有益な敎育を施さない。彼等は容易に我子に勞働せしめることを承諾しない。我子が正直な勞働に憂身を窶すことは、一家の名折れだと思つてゐる。私は斯樣な息子に對しては、微塵も同情を持たぬ。

曾て此土地に宴會があつて、私の隣に一人の青年が着坐してゐたが、彼は私に

向つて斯う云つた。『コンエルさん、あなたは御病體のやうですから、私の自動車でお歸りなさつては如何ですか』私は彼に禮を云つて、其自動車の眞中に坐を占めたが、軈て外側の運轉手の脇に坐つて『此自動車はイクラしたでせう』と尋ねた。『六千八百弗です。其上稅金まで取られたのです。』『で、君の主人は自分でこれを運轉しないのですか』。私が斯う問うた時、運轉手先生其手柄握る手を放さんばかりに笑つた。餘程ビックリしたと見えて。人道へ乘り出してしまつた。それから街燈柱を一廻りして再び車道に戻つた時にも、彼はマタも哄笑した。彼は云つた。『主人が之を運轉しないかですつて！主人にそれが分つたら、嘸ぞ結構でせう

にネ。』

私はモ一つ經驗話をしやう。私は或時講演を了へて、ホテルへ戻つて來た。私が番頭の机のソバまで來ると、そこに紐育から來た或る百萬長者の息子が立つてゐた。彼は實に破天荒の服裝をしてゐた。頭の横つちよに、ぴか〳〵光る金總付のトルコ帽を戴き、片腕には立派な金柄のステッキを抱へてゐる。其如何にも見透し苦くさうな厚い眼鏡、其バッタの足に似た細い深靴、私はそれを見て實に嘔吐を催さずには居られなかつた。彼は氣障な口調で番頭に、紙と封筒を呉れと願つた。番頭は氣早に此男の頭から足先までキョロンと見廻はして、それから紙と

封筒を抽斗から引出して彼に投げ與へた。其時の樣子ッたらない。厭に氣取つて、見えもしない眼鏡の曲りを直し、それから七面鳥のやうに胸を張り出して『ネエ君、之を向ふの机まで持たせてやつて呉れないか』と云つて。今番頭から受取つた紙と封筒を差し出した。あゝ唾棄すべき男よ。彼は僅か二十歩の間ですらも、自らそれを取運ぶことが出來ぬのだ。私は斯樣な下らぬ人間に對しては爪の垢ほどの同情も持たない。そこで諸君、諸君に若し資金がないとすれば、私は實に其事を喜ぶのだ、諸君の要するものはコッバア、センッ（錢）にあらずして、實にコンモン、センス（常識）である。私はモ一つ最好の適例を擧げやう。それは諸君御

熟知のステワート君の實話である。エー・ティー・ステワートは紐育の或貧家の息子であつた。彼は最初一弗半の小金を持つて、人生の大海に乘りだした。所が彼は最初の事業で其中八十七仙餘りを損失した。彼は人の需要を顧みず、矢鱈に針や絲やボタンを買込んだのであつた。そこで彼は『モウ決してコンナ事で損をしまいと決心した。』それから彼はアチコチを研究し廻つて、町の人々が何を最も需要してゐるかを調べた。其結果彼は自分の最も適當と判斷した商賣に六十二仙半を投資した。之が抑々彼の成功の始めであつた。彼は其後も必らず此主義に則つて事業に着手した。斯樣にして彼は後來四千萬弗の富を獲得した。それと云ふも

要するに、彼が最初の試みに失敗したお蔭である。其失敗に依つて人々の需要してゐる仕事に、資金を投じなければならぬと自覺したお蔭である。諸君も亦、商人として製造家として勞働者として、常に人に實用の物を供給する立場を離れてはならぬ。此立場こそ人道の如く廣大にして、又聖典其者の如く深遠なる一大主義であるのだ。

そして之は獨りステワート君ばかりではない。有名な紐育のジョン・アスタア君も斯うして巨萬の富を造つた。諸君の中には、或は『それは紐育だから出來たので、フィラデルフィヤでは迚も出來なかつたであらう』と云はれる方があるか

も知れぬ。それでは一つ諸君に御尋ねしやう。諸君は曾てリイスの有名な富豪統計書を讀まれたことがあるか。此書は一八八九年紐育に於ける百萬長者百七人の經歷を網羅したもので、之に依ると右の百七人中紐育で其財産を造つたものは僅々七人に過ぎない。其中六十人までは人口三千五百以下の小都市で其財産を造つた。今日米國の最大不動産所有者は其生涯を通じて未だ曾て人口三千五百の小都市から外に出なかつた。諸君の居所は諸君の姓名と同じく、財産を造くる點に於いて全く沒交渉の問題である。されば フィラデルフィヤで金儲のできぬやうな人は、紐育に行つても所詮金持にはなれない。

ジョン・アスタアは曾て或帽子店の主人に金を貸して、其店を抵當に取つてゐた所が其店では中々商ひがない。借り金の利息だけの賣上げを得ることすら困難であつた。そこでアスタアは右の抵當契約を解除して、今度は其主人と組合ひ、自分も其店の一員として大にやつて見やうと云ふ氣になつた。彼は勿論一文も資金を調達してやつた譯ではない。店員も元通り、店の飾り付けも元通りであつた。それがジョン・アスタアの加盟した爲に、今日では紐育三大帽子店の一を成してゐる。彼は何うして此店を斯樣に成功させたかと云ふに、前記の契約成立するや否や、彼は毎日公園のベンチに腰を下ろして往來の婦人の帽子を觀察してゐ

る。そして之は確かに時代の要求だと思はれる品に氣付いたから、早速其品を買込んで店に飾り付ける。斯う云ふ方法で、彼の店には結局世間に需要のない品は一つも備え付けぬことになつた。所謂店ざらしの品は一つもなくなつた。持合せの品は總べて羽の生えたやうに賣れて行く、之が彼の成功を全うせしめた根本の理由であつた。

諸君は數百萬の資本を以て、トラストを組織した後でなければ、決して製造業に成功することは出來ぬと云はれるかも知れぬ。然しそれは大なる見當違いである。世界全史を通じて今日ほど無資本で製造業に成功すべき好時機は未だ曾てな

かつたのだ。それでもマダ諸君は『無資本では始まらぬ』と云ふか。然らば私は更らにモ一つ實例を擧げやう。否、擧げねばならぬ。それは私の青年男女に對する義務である。諸君が若し眞に社會公衆の需要を洞見することが出來たなら、それは實に如何なる資本よりも貴重なる商賣の元手である。

マサチユセツ州ヒンガム町に一人の貧乏な失業者が住んでゐた。彼は之ぞと云つて爲すべき仕事もないので毎日自宅の廻りをブラ〳〵遊つてゐた。彼には數人の子供があつた。或日の事彼は子供だましに、道から板片を拾つて來てそれを細かに刻んで木鎖を造つてゐた。そこへ丁度隣の大將がやつて來て『何うです、一

つオモチヤを拵へて、賣つて見ては』と云つた。『でも何んなオモチヤを拵へたら善いか分りませんネ』『何にソレは君の子供さんだちに聞けば分るさ』『そんな事云つたッて家の餓鬼共は他所樣の子供衆とはちがひますからネ』。

かうは云つて見たが。彼も內々隣の大將の言葉を面白いと思つた。そこで彼は翌朝自分の神さんを捕へて『何んなオモチヤが子供に向くだらう』と尋ねた。神さんは人形の寢床や、馬車や、蝙蝠傘や其他色々の品を數へ立てた。それから又彼は自分の子供の意見をも聽いて、茲に愈々薪木を材料に（彼は新たな材木を求めるほどの元氣を持たなかつた）武骨な頑丈なオモチヤを造り上げた。それが又

非常に世間から珍重がられて、彼は程なく多少の財產を造ることが出來た。ラウソンの『熱狂せる財界』を讀むと、此男は今では舊マサチユセッ切つての大富豪になつてゐると云ふ。諸君、彼は果して多大の資本をかけて此事業を始めたのであらうか。成るほど多少の資本はあつたに違ひない——少なくともナイフ一挺は彼の資本であつた。然し其ナイフとても、本當は貰つたものやら、拾つたものやら。

私は曾て此事をニユー・ブリテンで、も話した事がある。其時傍聽席の前から四側目に一人の婦人がゐた。彼女は講演の終了後家に歸つて、カラーをハヅさうと

したが相にく鈕が固くてなか〳〵ハヅレない。そこで彼女は癇癪を起して、それを無理に引きちぎるやうに脱ぎ棄てゝ、向ふに放り投げ、御亭主に向つて『モツト善い鈕を買はなくちや』とコボした。スルト亭主の曰く『今晩のコンヱルさんの筆法で云へば、扱ひの便利な鈕の需要がある譯だね。何うだ、一つ鈕屋を始めては。ウント儲かるぜ』。私は此事を後に聞いて、甚だ遺憾に思つた。彼は此一語を以て、自分の妻を冷かし、又私を冷かしたのだ、私が斯うして多年金儲の福音を宣傳してゐながら、存外に成績の擧がらぬ譯は、世の中に此亭主のやうな不眞面な人間が多いからである。今晩の聽衆諸君中にも眞に私の言葉を守つて、巨萬

の富を重ねやうと決心なさる方は、恐らく十人に一人もあるまい。然しそれは私の罪ではない。諸君の咎である。諸君が私の忠告を用ゐやうとしない限りは。いくら饒舌ても無益である。若し前の婦人が、御亭主に冷かされた時『それぢや』と云つて、直ちに新らしい鈕の販賣に着手したなら、彼の女は必らず立派な身代を造る事が出來たのである。今日流行の折れ鈕を發明したのは、英國婦人であつた。此婦人は後にも色々の新式鈕を發明して大身代を造り上げた。前の婦人とても、心掛次第でさうなれないこともなかつたのである。

私は此間或新聞に、婦人が物を發明した例がないと書いてあるのを見た、諸君

婦人は果して發見の無能力者であらうか。若しさうだと云ふ者があるならば、私は今日婦人諸君の頭を飾る假髪は何うして出來たのかを尋ぬて見たい。御承知の通り、それはジャカード式織機で造る。此織機を發明したものは、果して婦人でなかつたらうか。果してジャカード夫人でなかつたらうか。其他輪轉機を發明したのも婦人である。印刷機を發明したのも婦人である。我國の重なる資源として今日何人も忘れることの出來ない、アノ操綿機の發明者は、グリーン夫人であつた。ミシンの發明家は誰かと問へば、三尺の童子と雖も異口同音にエリヤス・ホウの名を呼ぶ、然し其實際の發明者はホウ君でなくて、ホウ夫人であつた。

私は曾てホウ君と共に南北戰爭に從軍した。當時彼は屢々私のテントにやつて來て、色々の雜談に耽つた。其時私は彼自身の口を通じてミシンの眞の發明者が彼でなくて、彼の夫人であることを知つた。尤も彼も既に十四年間ミシンの發明に頭を煩ましてゐたのであるが、何うもなか〳〵甘い考が湧いて來ない。そこで或日の事彼の夫人は。こんな具合では結局一家餓死の悲嘆を見ねばならぬと云ふので、茲で大に決心して良人の發明を手傳ふことにした。それから二時間後に首尾よく此機械が發明されたのである。

マッコニック氏の通信によれば、かの輕便草刈機を發見したのは西部ヴージ

ニヤの一婦人である。之より先マッコニックス父子は多年此草刈機の發明に思を致したが、何うも甘い考が湧かないので、遂にそれを斷念した。所が此婦人は其後を承繼いで、齒金を何本も拵へてそれを板の一方に打ちつけ、其板に一本の緊弛軸を備へた。そしてそれに針金を附し、それを左右に引いて齒金の開閉を自在ならしめる工夫をした。之が卽ちかの草刈機の原理である。

斯くの如く婦人にして種々ある機械を發明する事が出來るとすれば、我々男子の發明し能はぬものは此世の中に一つもない筈である。

そこで世界の大發明家は抑々何人であるかを考へて見たい。大發明家は諸君の

スグ隣りに着坐して居る。否、諸君自身が卽ち其大發明家なのだ。斯う云ふと諸君は恐らく答へるであらう。『私はマダ何も發明した事はない』と。然しそれは獨り諸君ばかりではない。如何なる大發明家と雖も、實際其發明を實行するまでは何も發明して居らぬのだ。大發明家とて何も諸君と違つた人間ではない。眞に偉大なる人物は、卒直な平凡な、飾り氣のない常識家なのだ。だから大發明家の隣人は決して彼が爾かく異常な人物だと云ふことを知らない。彼の知己も友人も其偉大を認めることが出來ぬほどに、彼は單純であり、質素であり、マジメである

のだ。

眞の偉大は屢々人の注意に上らぬ。私は曾てガアフィールド將軍の傳を書かうと思つて、將軍を其自宅に訪れたことがある。其時將軍家の表門に、何事か人が大變群がつてゐたので、隣家の主人は私を其裏門に案内して行つて『ジム公、ジム公』と云つて將軍を呼んだ。軈て將軍のジム公は裏口に出て來て私を其部屋に案内した。彼は實に米國最大人物の一人である。而も彼の隣人に取つては、依然として一個の『ジム公』たるに過ぎなかつた。

又南北戰爭の時、私の統率してゐる兵士の一人が死刑の宣告を受た。そこで私はワシントン市の白館に大統領を訪ねた。私は軈て控室に案内された。そこには

澤山の面會人が待合せてゐた。係りの役人が出て來て一々其用向を尋ねる。軈て私の番が來た。私は係りの役人に案内されて、大統領室の前に立つた。私は胸の動悸を禁じ得なかつた。私は正直に告白する。私は曾て屢々彈丸雨飛の中をくゞつて來た。幾多の敵の彈丸が私の耳朶をかすめた。それは實に恐ろしい事である。私はいつも逃げる用意をしてゐた。或老兵が『大砲の口先に立つなぞは朝飯前だ』と大言壯語したが、私は此の一語には寸毫共鳴を感じない。然し私が大統領室の前に立つた時は、此實戰よりも尙恐ろしいやうな感じがした。が、私は全身の勇を鼓して、腕一杯力を罩めて大統領室のドアを叩いた。スルト中から大きな聲

で『おはいり』と云ふ應答がした切り、別段入口まで出て來て案内の勞を取らうともしない。

かうして私は椅子の片端に恐々腰を下ろした。主人は別に私の方を振り向きもしない。私は今、世界に於ける最大偉人の一人エブラハム・リンカンの面前に坐してゐるのだ。彼は其日常生活に於いていつも此規定を守つてゐる。曰く『人一事を爲す時は必らず全心の注意を以て之に當るべし。中途より他の事に手を出すべからず』。だから彼は私が部屋に入つた時も、平然として其認め物を續けてゐる。私の方を振り向かうともしないのだ。が、軈て彼の仕事は終つた。と。同時

に彼のヤツレた顏に、一種云ふべからざる微笑が現はれた。彼は簡明に云つた。『私は多忙人ですから、何うぞ簡單に御用向を叙べて下さい』。そこで私は自分の云はんとする所を卒直に語つた。『彼はそれに答へて云た。『其事は私も兼々聽いて居ります。數日前スタントン君からも伺ひました。決して御心配は入りません。米國大統領は未だ曾て丁年未滿の一青年を銃殺せしめるやうな命令書に署名したことはありません。將來も決してありません。あなたは此事を其青年の母親に傳へ下されても宜しいです。』

それから又二人の間にコンナ問答が取換はされた。『戰地の景況は何うですか』

と云ふから、『何うも時々は力拔けのするやうな事があります』と答へた。『何に大丈夫です。我々はモウ大勝利です。光明は近づいて來ました。米國大統領の仕事は容易でありません。私が恙なく之をやり終れば嬉しいですがネ。さうした ら私は家内を連れてスプリングフイールドへ引退します。私は彼地に農園を買ひました。兎にかく彼處で以前のやうに毎日二十五仙づゝ儲けられゝば不足はないのです。家内は騾馬を持つてゐます。私は彼地で玉葱を養植しやうと思つてゐるのです。』

それから又彼はコウ尋ねた。『あなたは田舍育ちですか』。『さうです、マサチユ

セツ州バークシャイア・ヒルス育ちです』と私は答へた。彼はそれから大椅子の片隅に脚を投出して『私は幾度か聽きました、アノ山では羊を岩間の草地へ導くことが容易でないさうですネ。』彼は斯う云ふ調子で、何事にも氣取らず、質素な親しみ深い。全くの日常人であつた。一介の農夫に過ぎなかつた。

それから彼は一卷の用紙を取つて、私を見上げながら『では之で』と云つた。私は其暗示に應じ、卽座に立上つて室外に去つた。私は室外に出た後も、私とツイ今し方まで話合つてゐた人が、有名な大統領リンカンだとは何うしても思へなかつた。それから數日後彼は凶漢の毒手に斃れた。私は彼の柩に近いて、仰座に

横臥してゐる彼の死顔を熟視した。其時私は今更らの如く。此人が世界最大人物の一人にして、米國自由の恩人たる又宜なる哉と感じた。然し斯くの如き絶世の偉人も、其隣人等に取つては、矢張り一介の『エーブお爺父』たるに過ぎなかつたのだ。

世には自分のエラサを人に見せやうと思つて、日常の些事には全く頓着しないやうな風姿をするものがある。豪勢な態度で人に接する者がある。得意に風を切つて町をネリ歩く男がある。斯樣な人間は果して眞の大人物と云へるであらうか。否々、彼等は其大足に支へられた風船玉に過ぎぬものである。其處に何の偉

大があらうぞ。

私は或貧乏人がフトした出來事から巨萬の富を重ねた實話を諸君にお話したい。マサチユセツに一人の製針職工がゐた。彼は三十八歳の時身體に負傷を受けて以來、碌々收入を得ることが出來なかつた。彼は或事務所で證書に書き入れた鉛筆文句を消し取る仕事を與へられた。彼はソレをするに、最初消しゴムを其まま指で摑んでやつたが、それでは何うも手が疲れていけない。そこで彼はゴムを棒切れの先につけて、それを使つてゐる時に、丁度彼の小娘がやつて來て『お父さん、ソレは特許ぢやなくツて』と尋ねた。彼は後に巨萬の富を有するに至つて

から斯う云つた『娘の此一語に暗示を受けて、私はゴム付鉛筆を造つて特許を出願した』と。彼の富は實に斯樣にして造られたのである。彼は其爲に一文の資本も投じなかつたのだ。

『フィラデルフィヤの大人物を予に示せ』と私が要求するならば、諸君の或者は恐らく斯う答へるであらう。『フィラデルフィヤに偉人あるなし、一人もあるなし。ローマには偉人があらう。倫敦、彼得堡にも大人物はあらう。然し此地には一人もない』と。が、フィラデルフィヤは他に類のない富有の大都市ではないか。而も諸君はフィラデルフィヤに何等の偉大をも期待して居らぬ。諸君は只、

自分の住ふ町を徒らに貶下してゐる。フィラデルフィヤの街衢、フィラデルフィヤの立法、フィラデルフィヤの改良意見、諸君は之等のものを悉く貶下してフィラデルフィヤには最早何等の望みなしと云ふ。それだから何時まで經つても此町は繁昌しないのだ。そして諸君の生活も亦一向に向上しないのだ。

諸君は今や蹶起せねばならぬ。神と人とを信じ、諸君の現住する此フ市の實力を信ぜねばならぬ。其處には實業その他の有益事業に對する機會が無數に横つてゐる。之より大きな好機は未だ曾て存しなかつたのだ。我々は此町を貶下してはならぬ。寧ろ大に賞揚せねばならぬ。

所が茲に二人の青年がある。そして其一人は立つて云ふ。『フィラデルフィヤには確かに之より大人物が出るに違ひない。然し過去に於いては一人の大人物も居らなかつた』『然らば其將來の大人物に君は何時ならうと云ふのですか』と問へば『それは私が役人になつてから』と答へるかも知れぬ。青年よ、君は我國の如き政體の下に於いて役人たることが、如何に一小些事であるかを知らぬのか。偉人は時として役人になるであらう。然しながら我米國の要する人物は、我々人民の命令を善く信奉して、それを實行する人物でなくてはならぬ。米國民は人民に依つて、人民の爲に治められる國民である。隨つて役人は人民の召使でなくてはならぬ。聖書にも『僕は其主人より大ならず』と云つてゐる。聖書は又云ふ。『送られたる者は送りたる者より大なる能はず』と。人民は治める。人民は治めねばならぬ。そして若し人民が斯く自ら治めるものとすれば、我々は官界に何等の偉人を要さないのである。偉人が若し我國の官吏たるに至らば、我國は實に十年を出でずして一個の帝國に豹變して了ふであらう。

婦人選擧權が追々實現されやうとしてゐる時節柄、私は『自分も何時か大統領たらん』と語る多くの婦人を知つてゐる。私は近き將來に於いて、婦人選擧權の實施せらるゝを疑はない。然しながら單に官吏ならん慾望を以て、選擧權を得や

うと望む婦人があるならば、彼等は決して其努力に價する何物をも得ることは出來ぬであらう。我國は決して投票で支配されるものではない。それは實に力に依つて支配されてゐる。野心に依り、企業に依つて支配されてゐる。投票は結局、之等の力に左右されしてまふのだ。されば官職を求めて投票せんとする、婦人は實に驚くべき見當違ひをして居るのである。

所が又今一人の青年は斯う云ふ。『米國が一朝他國と干戈相交ゆるに至らば、其時フイラデルフイヤにも大人物が出て來る。其時私は、敵の彈丸雨飛する中を、猛虎の如く馳け廻はり、敵の軍旗を奪取し、それをズタ〳〵に引裂いてやる。私

は其戰功によつて戰爭終結した曉には、如何なる重要の官職をも意のまゝに占めることが出來るであらう。曾てフイラデルフイヤに於て米西戰爭の勇士ホプソン大尉の凱旋を迎へたことがある。當時私は相にく他に行つて不在であつたが、若し其私も鄕里に居つたなら私が確かに多數市民と口を合せて『ホプソン萬歲』を絶叫したであらう。何せならば大尉の功勞は其受くる所の報酬よりも遙かに大きかつたからである。然しながら私が當時小學校を參觀して『サンチアンゴ沖で敵艦メリマックを擊沈したのは誰ですか』と質問した場合、『ホプソン大尉』ですと答へる學童があつたなら、其は實に眞八分の一に嘘八分の七と斷言すと云

はねばならぬ。當時ホプソンの外にも、尙七人の勇士ありしことを忘れてはならぬ。ホプソンは將校であつたから當然に砲煙除の後方に立つことが出來たのだ。滿堂の諸君、諸君は諸君の最高知識を集めて考慮しても、其七人の名前を擧げることは出來ぬであらう。

總べて我々は、さう云ふ風に歷史を敎へてはならぬ。自分の地位は如何に低くとも、其義務を立派に盡し得る人は、國王が其玉座に就くと同じ權利を以て、國民一般の尊賞を報ひらねばならぬものである。實戰で將官が陣頭に立つやうな場合は決してないのである。

私は南北戰爭後、リイ將軍を訪問したことがある。將軍は諸君も御承知の通り偉大なるクリスチャン紳士である。米國の誇りである。單に北軍ばかりでなく、南軍も亦さう信じてゐる。當時將軍は其僕ラスタスの事を私に話した。將軍は或時彼に。からかひ半分こんな事を尋ねた。『ラスタスよ、汝の隊の者は皆戰死したのに、獨り汝だけ生還したのは、何うした譯だ』。ラスタスは久しく將軍の顏を見て目ばたきしてゐたが、軈て口を開いて『何せと申して、戰ひの始まつた時には私はいつも大將樣方の側に居つたからです。』

私は此時の證明として、モ一つ經驗噺をお話しやう。私は南北戰爭に凱旋して

懐はしき郷里に歸つた。其時私一行の凱旋祝賀會が賑々しく催された。軈て私は一行の先頭に立つて堂々と式場に繰込んだ。兵卒連は式場の兩側に、そして私は其一番前面の席に坐を與へられた。民衆はギッシリ詰め込んでゐる。町の役人はゾロ〳〵這入つて來て半圓を造る。其中に市長も見えた。彼は實に善人であつたが、何うも役人臭さくていけまい。彼は徐ろに進み出でゝ自分の席に就いた。ソレから其強度の眼鏡の歪みを直して、當りを見廻はした。其時彼は突然私の居るのに氣付いたと見え。演壇目近かに進み出でゝ、私を役人の側の席に招いた。私は招かるゝ儘に彼等の側に坐を換へた。

軈て市長は演壇に進み出でた。私は彼が先づ當日の辯士として牧師を紹介するのかと思つた。所が驚くべし。演說などは迚も出來まいと思はれた彼が、憶面もなく草稿を擴げ、眼鏡の曲りを直して、肩をはらし、右足を心持ち前方へ投出して、漸く口を切り出した。

『市民諸君』、彼が此一語を發するや、彼の膝は慄へ、それが又全身に傳つた。此一語で彼の言葉はつかへてしまつた。そこで彼は草稿を嚙ぢるやうに引寄せた。そして拳固を握つて全身の勇を皷した。『市民諸君』、彼は又かう云つた。『諸君、我々は——我々は——我々は——我々は——實に歡喜に堪えないのであ

る。我々は之等の勇敢なる士卒を鄕國に迎へることは、實に歡喜に堪へないのである。殊に我々は――殊に我々は――堪えないのである。殊に我々は、今日此青年勇士（私を指しながら）を迎へたことを喜ぶのである。此青年は一軍の統率者であつた。我々は彼が其一軍を血戰の巷に統率するのを目擊した。我々は彼のヒラメク劍を眺めた。彼は其劍を日光にヒラメカして、進め！と叫んだのである。』

あゝ諸君、此市長の如何に實戰に無知識である事よ。若し彼が少しでも實戰の事を知つて居つたなら。彼は危險時に步兵將校が其兵卒の先頭に立つなどゝ云ふことの有り得ないことを心得居るべき筈である。かやうな行動は將校として殆ど

犯罪に等しき暴擧なのだ。私は劍をヒラメカして進め！など命令した覺はない。誰れが、自分の兵士前面に立つて、敵と味方との銃丸の的にならうぞ。實戰の際には、將官は必らず戰線の後ろに立つのだ。私は屢々參謀將校として過つて戰線を乘り越えた事があるが、其時にはいつも『將校、後へ！』の注意を受ける。そして將校の地位が高ければ高いほど、其位置も亦益々後方になるのだ。要するに彼が、私を將校なるが故に勇士と見たのは大なる誤解であつた。

私は終世此時受けた敎訓を忘れない。諸君人の大小は決して其將來に得べき官職によりて定まるものではない。只、些細な手段を以て大事を成就し、私的生活

よりして偉大なる目的を完成する所に人間の大があるのだ。されば諸君にして偉大なる人物たらんとせば、諸君は先づ此フイラデルフイヤに於いて大人物とならねばならぬ。此町に一層佳良なる街路を與へ、一層優良なる學校を與へ、一層深大なる文明と幸福とを與へ得る人は。必らず他の土地に於いてもソレと同樣の善事を爲し得るであらう。諸君は此一事を記憶せねばならぬ。曰く、諸君にして眞に偉大の人物たらんと欲せば、諸君は先づ現在諸君の居る所、現在諸君の占めて居る職業から出發せねばならぬ。自分の町に眞の幸福を與へ得る人、自分の町に居住してる間に善良なる市民たり、一層善良なる家庭を造り得る人、店に働か

うが、家に留まらうが、兎にかく常に幸福であり得る人、又何處にあつても大人物たらんとする人は、先づ此フイラデルフイヤに於いて偉大なる人物たらんと努めなければならぬ。

修養講話　青年實訓「金剛石の土地」終

大正六年四月廿二日印刷
大正六年四月廿五日發行

定價三十錢

譯者　高畠素之

發行者　東京府豐多摩郡中澁谷八九六番地　宇野富夫

印刷者　東京市麹町區有樂町二丁目一番地　吉原良三

印刷所　東京市麹町區有樂町二丁目一番地　報文社

不許複製

發行所　東京中澁谷八九六番地
振替東京二七四七三番
自教社

終